Thomas Gray, "Elegy Written in a Country Church Yard" The "Pembroke" MS とその周辺事情

廣　田　　稔

トマス・グレイ（Thomas Gray 1716-1771）の「墓畔の悲歌」"Elegy Written in a Country Church Yard"（1751）は，明治15年『新体詩』誌に載せられた矢田部尚今（1851—99）による「山々かすみいりあひの鐘は鳴りつつ野の牛は」の出出しで「グレー氏墳上感懐の詩」と題して翻訳され，我が国に紹介された。この名詩は，その後我が国に於いても，人口に膾炙し，筆者の所蔵する明治34年に出された『英文学史』に於いて，坪内逍遥は「グレーが作のうち，論ずるまでもなく第一位を占むるものは『墓畔吟』なり」[1] と述べ，詩人スインバーンの「この作のみの誉れにても，グレーは将来の諸代に対して奪ふべからざる無上の地位を占む」という評を引用して，「『墓畔吟』は，夙に我が読詩社会の熟知せる所」[2] と記している。又，平田禿木も「一篇墓畔の賦，ゴールドスミスが荒村行とならび称せられて，よく我が国人に知らるるは，かのケムブリッヂの詩隠トマス・グレイなりとす」[3] と評している。この "Elegy" に関しては，既に福原麟太郎博士の『トマス・グレイ研究抄』があり，詳細な研究がなされているが，この小論に於いては上記研究抄に基づくというのではなしに，トマス・グレイと "Elegy" に関して筆者自身が直接に知り得た資料，特に，詩人がその生涯の大部分を過ごしたケンブリッジ大学，ペンブルック コレッジ（Pembroke College）に残されている，詩人直筆の，所謂，ペンブルック草稿として知られるこの詩の原詩と，それが収められている *The Common Place Book* VOL I-III に関して記し，併せて詩人がこの名詩を書き終えたと考えられる，グレイ自身と彼の母と叔母の眠る Buckinghamshire の Stoke Poges の Parish Church of St. Giles についての記述を行いたい。筆者はこの教会のみならず彼が学んだイートン，ケンブリッジで最初に入学した Peterhouse も又実地に訪れ，収集を試みた資料も併せて

この小論の後楯としたい。(写真資料参照)

筆者は1992年から93年にかけ，ケンブリッジ大学に於いて研究に従事して以降，毎夏同 Pembroke College (1347年創設) に於いて研究に従事する機会を与えられている。このことから同大学が創立された13世紀以来今日に至る歴史の中から輩出した幾多の文人達の足跡を跡付けることを一つのテーマとして，ケンブリッジ大学文人に関する拙考をシリーズで出したいと考え，このような線から先に 3 つの論考を記すことが出来た。今回上記 Pembroke College について考える時，この学寮も他の学寮と同様，輝かしい文人達を輩出していることを記さねばならない。英詩の「詩人の中の詩人」と仰がれる *The Faerie Queene* (1590, 1596) の作者 Edmund Spenser，James I 世の勅命を受け，オックスフォード，ケンブリッジの47名の学者たちを率いて『欽定英訳聖書』として知られている近代英語を画する聖書翻訳の大業 *The Authorized Version* (1611) を成した Sir Lancelot Andrews (1222-1626)，詩人 Christopher Smart (1722-1771)，そして近くは桂冠詩人 Ted Hughes 等である。この College は英国がトラファルガーの海戦でネルソン提督の指揮下，旗艦 Victory 号によって，ナポレオン軍を破った歴史上英国最年少の宰相であった William Pitt の出身の学寮であり，この College Chapel はロンドンの St. Paul 大聖堂を建築した英国最大の建築家 Sir Christopher Wren による，彼の第一作の建築物として重要なもので，Wren Chapel と称されている。パブリック スクールの名門，イートン学寮を創設したヘンリーⅥ世は，この学寮に大いなる愛着を示し，自らの "adopted daughter" と呼び，この学寮に土地を与える憲章の中に「大学のすべての場所の中でまばゆく輝き，又輝いてきた著名にして最も貴重な学寮」[(4)] と述べている。トマス・グレイがいた当時の学寮の庭園に関して Thomas Salmon は *The Foreigners Companion Trough The Universities of Cambridge and Oxford* (1748) の中で以下のように記している。

[The] Garden is Large, well laid out, full of Fruit,
and has a good Bowling-green in it.

The North Wall of the Garden, which is very long, and reflects the warm,
Rays of the South Sun makes the Walk
which runs parallel to it the best Winter walk in Town.

庭園は大きく見事に広がって
果実多く立派な芝の球戯場をその中に備えている
長々と続いて南からの太陽の暖かい光線を映し出す庭園の北壁は
この壁に平行して続く散策の道を街中で最高の冬の歩道となしている。(5)

コレッジ奥のかつて Fellows' garden の北側にある遊歩道は，学寮マスターである当代英国第一の聖職者と目されながら，Queen Mary の不興を買い，ロンドン塔に送られた後1555年10月16日，Oxford に於いて火刑に処せられた Nicholas Ridley に因み "Ridley's Walk" として今日も残されている。そして彼の肖像画はコレッジのダイニング ホールの暖炉の右側すぐ隣り，あたかも暖炉の火によって燃やされる程の近さの位置に揚げられているが，これはまさしく火刑に処せられたこの聖職者を偲ぶに相応しい場所と見放されている。Ridley は処刑に処せられるに臨んで，自らの懐かしいこの学寮に寄せて感動的決別の言葉を残している。

Farewell Pembroke Hall, of late mine own College,
my Cure and my charge:
... Wo is mee for thee, my own dear College ...
In Orchard (The walls, buts, and trees, if they could speake, would beare me witnesse) I learned without booke almost all Pauls Epistles, yea and I ween all the Canonicall Epistles, save only the Apocalypse.
Of which studie although in time a great part did depart from me,
yet the sweet smell thereof I trust I shall carry with me into heaven:
... The lord grant this zeale and love toward that part of Gods word
which is a key and true commentary to all the holy Scriptures,
may ever abide in that college so long as the World shall endure.

さらばペンブルックホールよ
先頃吾れ自らの学寮にして吾が救済にして，吾が預かりし者：
…吾れは悲しむ　吾が愛しき学寮よ
…果樹園の中で
（壁，控え壁，そして樹木よ　もしも彼らが物言えるならば
吾に証し立てもしよう）吾は殆どすべてのパウロの書簡を諳じたりと
然り，吾は思うに
ただヨハネ黙示録をのみ除く聖典の書簡をことごとく全てそらんじたり
その学びの大いなる部分が時経て吾が身から去りしものなれど
その芳しき香りは天国へと携えて行くこととなるであろう
と言うのも
以来この方そのもたらす恩恵をこの吾が生涯を通して感じきたとの思いを抱き
且つ
先頃は（それらの書簡が吾が身に今もなお留まろうとなかろうと）
同様の業をなしたるものと思うが故なり。
願わくば主よ，このすべての神聖なる聖書の鍵となり，
真の注釈となる神の御言葉への
この熱意と愛とがこの世の続く限り
この学寮に留まりたらんことを許し給え(6)

このような学寮の中央部，古くは Ivy Court と称されていてコレッジ ダイニング ホールと接する右側隅の 2 階に詩人グレイがその半生を過した部屋が現存する。今日 Thomas Gray Room として保存されているのがそれである。室内には詩人の 2 枚の肖像画と共に詩人畢生の名作 “Elegy Written in a Country Church Yard” の作詩の場，Buckinghamshire の小村 Stoke Poges の St. Giles 教会とその墓地を描いた小さな絵，Gray の友人で，その遺産管理者となり “Elegy” の詩人直筆の，所謂，Pembroke 草稿をコレッジに残すことに寄与し，自らも詩人であった William Mason の肖像画，そしてその後 Gray の亡き後この部屋を用いた宰相 William Pitt の肖像画等が掲げられている。

David Cecil はその著 *Poets and Story-Tellers* の中での "The Poetry of Thomas Gray" の項にグレイがブレイクとバイロンと同じ程度に個性的であると評して彼独自の個性の特色を端的に記している。「グレイは学問のプロとして際立った例であり，また，たまたま才能によって詩的芸術家としても運命づけられていた。彼にも優って学究的生活を送ったものは誰一人いない。彼の家庭的背景には何一つとして彼に提供するものを持たなかった。彼は気難しい学究的タイプの人間で，不釣合いな形で商業都市ロンドンのホガース的世界に生まれ育ったのである。しかしながら9歳の時イートンに送られ，イートンから彼はケンブリッジに進んだ，そしてケンブリッジに於いて24歳の時2年間の大陸旅行を除いた期間を除いて彼の残りの生涯を留まった。彼は結婚することもなく大学以外でのいかなる仕事にも携わることはなかった。30年の間，彼の生活は学究と学問的喜びとの間にわけられていた。ケンブリッジで書物を繙き，コンサートにはロンドンに出かけ，或いは1年に1度堂々と小さな休暇をイギリスの風光明媚な場所にとり，そこにおいて彼は中世の廃墟や夕日沈む湖水を細心の注意を払ってみつめた。ウォルター ペーターと劣らぬほど彼は古い英国の大学の特異な産物たる学問研究愛好家を代表する人物であった。(7) David Cecil は更にグレイを要約し "a typical eighteenth-century scholar-artist with a peculiarly intense response to the imaginative appeal of the past and whose pervading temper was a sober melancholy" グレイは「過去の想像力ある魅力に奇妙に強烈な反応を示した。典型的な18世紀学者芸術家であり，そのみなぎる気質はまじめな憂鬱性であった」(8) と記している。David Cecil はさらに以下のように記してグレイの感性が過去の歴史的遺産と深く響きあっていること，彼の歴史的洞察と詩的情調との融和をその特色の一つとしていたことを示しだしている。

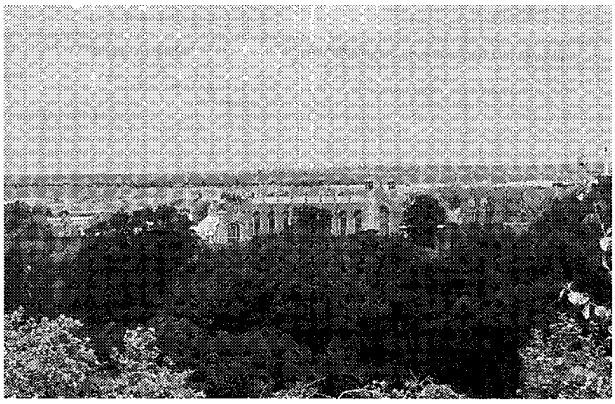
「あなた方は美しい情景に対するグレイの反応がその情景の持つ歴史的魅力と密接に混じりあっていることに気付いているだろうか。彼の感情は歴史的興味によって補強される時に常に最も強烈であった。そのようなときには美しいものは或る消え去った時代をもまた，思い浮かばせるものがあった。実際彼は常に彼と同時代の世界をその歴史的過去との関係で見る傾向があった。

彼のイートン学寮についての詩はウィンザーの古の銃眼付きの城壁の物陰に潜み，学寮そのものは学問が「今もなおヘンリー王の聖なる御影を崇めている」場所である。彼が田舎の教会の素朴な墓について瞑想していた時にすら，歴史的言及が自ら押し入っている。村のハムデンや，ミルトンたちがそこに葬られ眠っているかもしれないと彼は想像する。彼は貧しい人々の質素な埋葬をある壮麗なゴシックの大聖堂における偉人たちの華麗な葬儀と対照する。彼の文学それ自体に対する態度は主として歴史的態度である」[9]と。

グレイがその半生を単調で日々変わることのない深遠な学寮生活にあって，彼の心を常に魅了してやまなかったのは，彼を取り巻く古い歴史的建築物などであったからである。四心アーチや扇形ボールトや大きな窓を施された狭間飾りを特徴とした英国ゴシック建築様式の「垂直線の建物，エリザベス朝の邸宅，中世の金銀で彩飾された写本が等しく彼の心を動かし，夢と喜びに誘っていった。」[10]

The Thomas Gray Archive によれば，彼の歴史的なものへの趣向は，彼が9歳の時に入学することとなったイートン学寮の生活に根ざし，以後，彼の作品の多くの中に据えられていった。

グレイの詩中最初に印刷されたものとされる「イートン学寮の遠望の賦」は，歴史と伝統の彼の学び舎，イートン学寮をおそらくはウィンザー城の高台から眺めやりつつ，この崇高な学寮に思いを馳せながら作詩したものと思われ，そのようなグレイの歴史観を十分に味合いしめるものである。抒情性溢れる詩である。筆者自身，イートン学寮とウィンザー城を訪れ，ウィンザー城の城壁の高みから，前方に広がる森木立の向こうにイートン学寮の建物の上方部とその尖塔や塔を遠く望むことが出来ることを確認し，この詩の一節を彷彿させる情景を眼の当りにすることが出来た。（筆者撮影，写真資料参照）冒頭の3節近くは以下のものである。



ウィンザー城から望むイートン学寮

ODE
ON A DISTANT PROSPECT OF
ETON COLLEGE

YE distant spires, ye antique towers,
That crown the watry glade,
Where grateful Science still adores
Her HENRY's holy Shade:
And ye, that from the stately brow
Of WINDSOR's heights th' expanse below
Of grove, of lawn, of mead survey,
Whose turf, whose shade, whose flowers among
Wanders the hoary Thames along
His silver-winding way:

Ah, happy hills, ah, pleasing shade,
Ah, fields belov'd in vain,
Where once my careless childhood stray'd,
A stranger yet to pain!
I feel the gales, that from ye blow,
A momentary bliss bestow,

As waving fresh their gladsome wing,
My weary soul they seem to sooth,
And, redolent of joy and youth,
To breathe a second spring.

Say, father THAMES, for thou hast seen
Full many a sprightly race
Disporting on thy margent green

The paths of pleasure trace,
Who foremost now delight to cleave
With pliant arm thy glassy wave?

汝ら遥かなる尖塔よ，汝ら古の塔よ
水の流れの森木立の上に聳えて
ありがたき学問に励み　今もなお
ヘンリー王の聖なる御影をあがめているのか
そして汝らはウィンザーの高台の威厳ある岩場から
眼下の森や芝や牧場を眺めやるのか
汝らの芝，その木陰そしてその花々の中を
古きテムズは流れ行く　銀色に蛇行して

あぁ幸福の丘よ　あぁ楽しき木陰よ
あぁたわいなくも愛されし野辺よ
そこはかつて私の子供時代に
さまよい歩いたところ。まだ苦しみを知らぬ者として
汝から吹き寄る烈風を身に受けて，瞬時の喜びを与えられもした
（そして今）汝らの喜びの翼をはばたかせて私の
疲れた魂を慰めてくれるように思えるのだ
そして青春の日の喜びをしのばせて２度目の春に
息吹を与えてくれるように思えるのだ。

語れかし父なるテムズよ，汝は数多き活発な
若者たちを見護ってきたからに
汝の川辺の緑地に喜びの道を辿り
彼らは　我先にと，そのしなやかな腕で
汝の鏡さながらの波を抜き手を切って泳ぐ喜びを
味合っているのではないのか

トマス・グレイは，1716年12月26日，ロンドン コーンヒルの St. Michael's Church の近くで金貸し業を行っていた父 Philip Gray と小さな婦人帽販売業を営んでいた母 Dorothy の12人の子供のうちの第5子として生まれた。母親の旧姓は Antrobus と言い，彼女はその姉 Mary Antrobus とともに店を開いていた。父親の Philip は陰気で時々母親に激しい暴力を振るい，内気で感受性強いわが子，トマスにもあまり心配りをしない父親であった。トマスは父の母に対する暴力のために，幸せな子供時代を過ごすことなく，体も弱く内向的少年として育っていたので，母ドロシーはそのような不健全な環境からトマスを救い出そうと願った。トマスにとって母方の叔父 Robert がケンブリッジ大学ピーターハウスでのフェロウであり，且つ，当時イートンの assistant master でもあってトマスを預かり，またその教育を受け持ってくれることとなり，且つ母のもう一人の弟 William もケンブリッジのキングズコレッジにいて，母の兄 Robert と同じくイートンの assistant master ということもあり，9歳の時イートンに入学した。(11)

筆者がイートンで与えられた資料 *Eton College* (PITKIN Unichrome, 2000) によれば，1725年から1734年テムズ川河畔ウィンザー城に向かい合う形で建つヘンリー6世によって1440年に創立されたイートン学寮に過ごすこととなったグレイは，ここで非常に幸せな学校生活を送り，Horace Walpole (1717-1797)，Richard West (1716-1742)，Thomas Ashton (1716-1775) という特に親しい3人の親友を得ることとなった。

Horace は宰相 Sir Robert Walpole の息子であり，後に〈恐怖派〉の小説 *The Castle of Otranto* (1764) の作者である。Richard West はアイルランド大法官の息子であった。彼ら4人は "quadruple alliance" (4人同盟) を結んだが，同様な気質を持ち，知的精神性で結ばれていた。「グレイは Orosmades，ウエストは Favonius，ウォルポールは Tudeus そして最後にアシュトンは Almanzor として知られていた。この友情の同盟と詩と学問への共通の興味」(12) を抱いて4人は極めて幸せな学寮生活を送った。グレイとウエストの間で交された書簡の中に，ウエストは以下のように記している。

Through many a flowery path and shelly grot
Where learning lull'd us in her private maze
The very thought, you see tips my pen with poetry
And brings Eton to my view

百花咲き乱れる小道と貝殻の洞窟を通り
学問がそのひそやかな迷宮の中で僕たちをあやしてくれる場所で
まさにこうした思いが僕のペン先に詩を記し付けさせ
イートンを僕の眼に浮かばせてくれるのが君にはわかるだろう(13)

グレイが詩作を意識したのは「イートンに於いて Virgil を学寮の学びの時間に，或いは課題としてではなく，自らの楽しみのために読んだ読書の中に於いてであった。」(14) 彼ら 4 人は古い伝統を持つイートンのロマンティックな環境に心酔し，この友情によってグレイは生涯深い影響を受けることとなった。ほかの友人たちの中に Richard Stonhewer (1728-1809) という人物があり，この Stonhewer がグレイの死後，彼の "Elegy" の直筆原稿をグレイが後にケンブリッジでその半生を送ることとなった Pembroke College に残すことになった人物であった。

1734年 Gray はケンブリッジの最古のコレッジである Peterhouse に入学を許可され，Ashton は1734年 8 月に King's College に，Walpole も1735年 3 月に King's に入るが，Richard West のみが Oxford に進学し，Christ Church に入学した。Gray は Eton に於いて，勤勉の日々を送り，すでに相当な評価できる詩を Latin 語で書いており，Gray は Walpole と共に Oxford の West にフランス語やラテン語の詩を書き送った。この頃 Gray は生涯の友，Thomas Wharton (1717-1794) と親しくなるが，Wharton は Gray が後に Peterhouse から移り，その後，残りの生涯を殆どそこで過すこととなる，Pembroke Collage の自費生であった。この Wharton は Gray から1750年12月18日に "Elegy" の草稿を贈られ，それが現在 The British Museum の中に (Egerton MS, 2400) として保存されているものである。

1742年はグレイが詩人として立った年であった。その年の夏にグレイは Stoke Poges に於いて "Ode on the Spring", "On a Distant Prospect of Eton College", "Sonnet on the Death of the West", そして "Hymn to Adversity" を書き，秋に "Elegy" を書き始めたと思われる。"Ode on the Spring" は West に 6 月に送られたがそれは送り戻されてきた。というのも West はその月のはじめに彼の乗ったアイルランド行きの船が難破して，不帰の客となってしまっていたからであった。West の死は，それより先のグレイの叔父 William Antrobus の死に引き続いたことによって，グレイには大きな悲しみであった。グレイは West の死を悼む 1 つのソネットを書いた。そして "Ode on a Distant Prospect of Eton" を同じ月に書いたが，それに先立って 2 人を失った悲しみはグレイに彼の少年時代の学舎の思い出にあまりにも大きな陰を落とすこととなった。

グレイの詩の中で，最初に印刷されたものは，1747年匿名で出版された "Ode on a Distant Prospect of Eton College" であった。翌年 "Ode on the Spring" 及び，"Ode on the Death of a Favourite Cat" が Dodsley 社からの *Collection of Poems* として出版されたが，それにグレイの名はなかった。1734年グレイが彼の叔父 Robert が Fellow であったケンブリッジの Peterhouse に入学したこと，友人 Walpole は1735年 3 月 King's College に入学し，それとほぼ同時に West は Oxford の Christ Church College に入学したことはすでに記したとおりである。

グレイのケンブリッジでの College が指示する科目は彼にとっては嫌悪すべきものであった。当時重視された勉学は彼は苦手で，友人たちも彼の性格にはそぐわぬ者ばかりであった。1736年12月に West 宛ての手紙には，日々，そして一時間一時間講義に耐えていることを書き記している。彼が melancholic な日々を多く送っていたことを記し出している。ただ，彼の自然への好奇心は，彼の Buurnham から彼が書き送った手紙が "first expression of the modern feeling of the picturesque"「ピクチャレスクという近代的感情を表した最初の表現」(15) と評され，これが Gray の後の人生に於いて十分に発展させられるのであり，Sir James Mackintosh に "he was the first discoverer of the beauties of nature in England"「彼はイギリスの自然美最初の発見

者」[16] であると言わしめている。

1747年彼は，生涯を通じてのもっとも親しい友人の一人，そして彼の遺言による遺著管理人として，または彼の伝記作者として，当時 St. John's College の若き学者であり，詩人でもあった William Mason と出会うこととなった。その頃グレイ自身は詩人として知られておらず，グレイの 3 つの Odes が1748年に *Dodsley's Collection* として出版された時も，彼の名は記されてはいなかった。

元々 "Elegy" はグレイの叔父 Jonathan Rogers が10月21日に亡くなった頃，1742年に Stoke Poges に於いて書き出されたもののようであったが，グレイは1749年11月，Stoke で叔母の Mary を亡くし，そのことが 7 年前に書き始めた "Elegy" を再び書き始めた動機付けとなったと推測される。そしてその後，数ヶ月間の推敲の後に遂に原稿を仕上げ，その一部を1750年 6 月12日に Horace Walpole に送ることとなった。

叔母の亡き骸は Stoke Poges Church 内の Hastings Chapel (A.D. 1558) の東の窓の下の教会の外壁のすぐ傍に葬られることとなったが，後にこの同じ場所に，Gray の母が葬られ，又その後 8 年後に Gray 自身が埋葬されることとなった。墓石の上にはこの小論の末尾に後述するように刻まれた碑銘を読み取ることができる。

"Elegy" は恐らく Richard West の死の年1742年に書き始められ，数年を経た後，再び書き出されて1750年に完成されているように思われる。この詩が書き終わったことについてはグレイがウォルポールに宛てた1750年 6 月12日付けの Stoke からの手紙に記されている記述が伝えていると考えられている。手紙の書き出しは以下の通りである。

"As I live in a place, where even the ordinary tattle of the town arrives not till it is stale, and which produces no events of its own, you will not desire any excuse from me for writing so seldom, ..."

「僕は町の人々のありきたりの雑談ですら新鮮味が失せてしまうまで届い

てこないような，そしてこの場所自体どのような出来事も生み出すことのない所に住んでいるので，君は僕からこれほどめったにしか手紙を書かないことに何か弁解を求めたいなど願いもしないことだろう…」と言う出だしで始まるこの手紙の文中に，グレイが次のように伝えているものが "Elegy" のことであるとされている。

"I have been at Stoke a few days (where I shall continue good part of the summer); and having put an end to a thing, whose beginning you have seen long ago, I immediately send it you. You will, I hope, look upon it in the light of *a thing with an end to it*; ..."

「僕は数日ここストークに来ている（この夏の大部分をここで過ごすことになると思う）そして随分以前に君にお目にかけたものに決着をつけたので，それをすぐに君の手許に届けます。君も終わりをつけたものとしてそれを見てもらいたく思います。」(17)

An Elegy Written in a Country Church Yard by Thomas Gray の著書 Francis Griffin Stokes によれば "Elegy" の詩人直筆によるものが現在３つあること（但しその全てに重要なテキストの異動が見られるという）が指摘されている。Stokes はこの詩が出版初期にさまざまな雑誌に載せられた多くの未公認版に基づけば，また，別に１つ，恐らく１つ以上が存在するのではないかと推察されると述べている。出版された版のうちグレイの存命中に少なくとも33種類の版が出され，加えて Dodsleys から13の四つ折判が出されているが，これらのうちどの１つとして細部の差ではあるが完全に同一のものはないとしている。(18)

上記の３つの直筆草稿は同じく Stokes に基づけば以下の通りである。

"Elegy" 草稿

Ⅰ. The "ETON" MS.

これは元々Pembroke College Fellow (1748-1760) であった詩人であり，

そして何よりもGrayの親友として，また彼の文学作品の遺言管理人であったWilliam Mason (ob. 1797) 所有のものであった。これが，MasonによってGrayの書いたほかの文書と共に，グレイの旧友であったPeterhouseのFellowであったRichard Stonhewer (or Stonehewer. ob. 1809) にMasonの遺言によって譲られていたものであった。その後原稿は彼の甥の一人Brightという人物——この人物は恐らくKing's Graftonのthe Rev. John Brightと思われるが——原稿は色々と競売にかけられ最後はSir William Fraser氏の所有となる。同氏の1898年の死の際に，Eton CollegeのSchool Libraryに保管されることとなったものである。[19]

II. The "Pembroke" MS.

これは前のEton MS. と共に詩人Gray生存中は，詩人の所有になっていたものであったが，これも先のWilliam MasonによってStonhewerに遺言で渡され，それをStonhewerはGrayの大量の直筆版と共にCambridgeのPembroke Collegeに贈ったものである。これを1838年12月12日the British Museumは "Facsimile of Gray's Elegy from the original MS" の形で取得しているのであり，それはS.L. Neale, 352, Strandにより写真製版されたもので，上質皮紙に印刷された。そして写真製版のメモ書きに "Preserved among the Manuscripts of Thomas Gray in the possession of the Master and Fellow of Pembroke Hall in Cambridge" と記され，鉛筆書きのメモには "Not published for sale." として非売品であることが記されている。[20]

III. The "WHRTON" MS.

これはGrayから友人Dr. Thomas Whartonへ1750年12月18日に贈られたもので，この手紙と同封の詩がThe British Museum (Eger ton MS. 2, 400)に保存されている。このMSはグレイのテキストの詳細に関する詩人の最終的決定を具体化したものとしてみなされるかも知れない，とF.G. Stokesは述べている。[21]

筆者はケンブリッジ大学Pembroke College Libraryの古文書保管室に所

蔵されている，赤い皮製の表紙に綴じられた3巻から成る *THOMAS GRAY'S COMMON－PLACE BOOK* VOL I, II, III を詳細に検証する機会を与えられ，VOL II の617頁と618頁に記述されているグレイ自筆の "Elegy, Written in a Country-Church Yard" (1750) を眼の当たりにすることのみか，ペンブルック・コレッジが創立550年の記念祭を迎えた年の1897年7月7日にこのグレイの The "Pembroke" MS として知られる "Elegy" をファクシミリ版で復刻した貴重な版をコレッジから贈呈を受け，現在手許に所有している。丁度110年前の復刻版である。

上記 *COMMON-PLACE BOOK* 3巻全体の頁数は VOL III の最終頁が1112と記されて，1000頁を越すものであるが，構成を見ると骨組みは以下の通りとなっている。

VOL I 冒頭部に，*Common Place Books* をペンブルック・コレッジに寄贈する旨を記した寄贈者 Stonhewer の遺言書の抜粋が記されている。記述のように Stonhewer はグレイの友人であり，グレイの直筆のものを保管貯蔵していた人物の一人であった。VOL I の冒頭2枚目に以下の記述がされている。

Extract from the will of the late Richard Ston-hewer Esq, who died January 30th, 1809

"I give to the Society of Pembroke College Cambridge the picture of Mr Mason done by Sir Joshua Reynolds, and the picture of the late Thos Gray Esqr drawn from memory by Mr. Benjamin Wilson: And I also give to the said Society three Manuscript folio Common Place Books of Mr. Gray's to be kept under the immediate care of the Master of the College and deposited in his Lodge."

1809年1月30日死去の故リチャード・ストンヒューワー氏の遺言より抜粋

ペンブルック・コレッジ協会にサー ジョシア・レイノルズによるメイソン氏の肖像画，又，ベンジャミン・ウィルソンによりその記憶に基づき描かれ

た故トマス・グレイ氏の肖像画を贈る。そして，また上記協会に対し，グレイ氏の四つ折判草稿 Common Place Books 3巻をコレッジ・マスター直々の管理の下にそのロッジに保管されるべく贈るものである。

さらに，所々で綴りが判読不可能なものがあるが，以下の記述が記されている。

In Chancery

This book and also the Sonnet on the Death of Mr. Richard West in Page 284 was shown to the Rev'd Christopher Alderson? Frederick Montague and Richard 不明 at the time of their respective examinations for the Rev'd Wm Mason 不明 John Murray Dost

要するにこの書を284頁に記載のリチャード・ウエストの死に寄せたソネットと併せてグレイの遺言管理人であったウィリアム・メイソン氏のために検証された趣旨の記載が記されている。

VOL I は記述の始まる最初の頁に全頁の記述があり，2頁目に右肩に E と記される頁がある。次は頁数のない全頁の記述，その次に F と記された頁，次頁も数字がなく，その次に G の頁，次の頁は数字なく A～L，M～Q の表，その次の頁に H とある。頁数の記された頁1は数字のみで白紙，そして左片隅に2と記された頁に "Adversaria" というタイトルの記述がある。その数行は以下の通りである。

The method of Mr. Lock's Common-place book is as follows; take a Page Book, divide the two first pages that face one another by parallel lines into 25 equal parts every 5th black, the rest red. Then cut them perpendicularly by other lines, drawed from top to bottom of the page, as in the table prefixed: ...

VOL I の終わりは461の白紙の頁，その前460頁目に頁数はないが，Large Maps of the Russian Empire from the latest Information, publish'd in

Scotland. 17 不明　という１行のみの記述がある。

VOL II は２頁分の記述のあと，初めて462という頁数が記されている。463の頁は "Socrates his Companions" という題目のもの，終わりは936 II，"Elegy, Written in a Country Church Yard" は617頁及び618頁に記されている。

VOL III は３頁目に933と記されて，その前に III A,D, という頁数が記されている。終わりの頁は1112である。

この "Elegy" の作詩の時期について後に Horace Walpole が William Mason に宛てた1773年12月１日付けの手紙の文面によると以下のようである。

"*The Churchyard* was, I am persuaded, posterior to West's death at least three or four years ... At least I am sure that I had the twelve or more first lines from himself above three years after that period."

「「教会墓地の詩」はウエストの死後少なくとも３年か４年後のことと僕は思っている。…少なくとも僕は彼自身からその後３年以上経って最初の12行かそれ以上を贈られたことは確かだ。」(22)

ウォルポールはこの詩をすぐに色々な友人たちに回覧のためであったと察せられるが，贈った。恐らくそれを *Magazine of Magazines* という雑誌社が手に入れて，この雑誌にグレイの詩を掲載したものと思われ，この雑誌を手に入れたある本屋から "Elegy" を自分たちの所で出したいと，グレイに出版の許可を求める手紙が送られてくるということとなった。グレイは自分の詩がそのような雑誌社から出版されるようなことなど思いもよらず，元々出版の意図もなかった彼は，このような状況になったことに当惑を隠しきれなかった。グレイは早速，結果的にこのような状況の原因をつくることとなったウォルポールに宛ててケンブリッジから1751年２月11日付けの手紙を書き送った。

"As you have brought me into a little sort of Distress, you must assist me, I believe, to get out of it, as well as you can ...."「君は僕をいささか困った破目に陥らせたのだから，それから出来る限り僕を助けてもらえるものと信じている」という出出しのものであった。手紙は次のように続いている。
(訳文のみ)「昨日僕はある紳士連（本屋と称しているが）一通の手紙を受取るという不運に見舞われてしまった。その紳士連というのが『雑誌社の雑誌』を入手したが，その中の教会墓地における *Reflections*「思索」と称する独創的な詩を自分たちの本屋で直ちに出版する積りであるというのだ。そして又この詩の素晴らしい作者が「僕」だということを知らされたというのだ。そして又本屋としては僕の寛大な許可のみならず，手紙をもらう栄誉に預かることは出来ないだろうか等ということなのだ。彼らが望む程僕は寛大でもなく，またそれ程手紙を書く人間でもない。僕には彼らが僕に与えた名誉を逃れる道としてはまずいが一つだけその方法が残されているばかりなのだ。君が君の所有するものからドッズレイにすぐ出版させるようにしてもらえばありがたいということなのだ。(１週間以内にはできるかもしれない)但し僕の名前は出さずに出版社にとって最も都合のよい形で一番良い紙と活字を使うことにしてもらいたい。出版社には出版社自身で序文を訂正してもらわねばならないが，詩の節と節の間には行間を置かずに印刷してもらいたい。何故なら，所々で詩の意味が行を超えて続いているからなのだ。そして題名は「Elegy，田舎の墓地で詠んだ悲歌」でなければならない。そして出版社に１～２行付け加えてもらえるなら，この詩は偶然に手に入ったものだと記してもらえればさらにありがたい。」[23]

グレイは親友ウエストを失ってすぐに「ウエストの死に寄せるソネット」を書いたが，それを記すことに際し，恐らく彼の念頭に浮かんだのはかつて詩人ミルトンがアイルランドに行く船が難破して溺死した友人 Edward King を悼む詩 *Lycidas* (1637) であったのではないかと推測される。"Elegy" の場合にも59行目に 'Some mute inglorious Milton here may rest'「黙したる名も無きミルトンもここに眠るかも知れぬ」という一行を初めとして，*Paradise Lost* や *Il Penseroso* のエコーを確認することができる。

ミルトンが『失楽園』を完成したコテッジはグレイが「墓畔の悲歌」を書いた Stoke Poges の St. Giles 教会墓地から僅かに数マイルしか離れていない位置にあり，ミルトンの詩句のエコーのいくつかの例を「悲歌」の中に認めることができる。"Elegy" を書き出したのはウエストの死の年であり，それを数年経て，完成に至るため再び書き起こしたのは愛する叔母 Mary Antrobus の死が契機であったとは言え，親友を失った Milton の心境はグレイの深く共感するところであったろうと推測される。後に詩人テニソン (Alfred Tennyson) が親友 Arthur Hallam の死を悼む名詩 *In Memorium* (1838) を作ったのも同じような愛惜の念によるものであったろうと推測される。友人ウエストを失った寂しさと嘆きとをグレイは十四行詩に託した。

In vain to me the smileing Mornings shine,
And rending Phoebus lifts his golden Fire:
The Birds in vain their amorous Descant joyn;
Or cheerful Fields resume their green Attire:
「空しくも私に微笑む朝は輝いて
赤々とした太陽は黄金色の炎をかかげる
小鳥たちは空しくも恋の調べを歌い
又陽気な野は緑の衣装で再び身を飾る」

こうした自然の営みも孤独に残された詩人の心にはただ友を失った空しさに思い沈むばかりであると慨嘆し，さらにこのように結んでいる。

I fruitless mourn to him, that cannot hear,
And weep the more, because I weep in vain.
「私はいま既にこの声すら届かぬ人を無益に嘆き，
空しく涙するがゆえになおしとど涙にくれる」と。

グレイのペンブルック・コレッジに残されている The 'Pembroke' MS は詩人の見事な細かい筆で記されているが，この復刻が1897年になされたことは先に記した通りである。筆者がコレッジより贈られて所有するこの復刻版

には，（上記の草稿の原詩には617頁目の左上方部に記されている）この詩の出版に関する細かい字での記述が復刻されてはいない。筆者はその部分を詳しく判読することが出来たので下記に記しておきたい。

publish'd in Febiry 1751 by Dodsley, & went thro' four Editions, in two Months; & Afterwards a fifth 6th 7th & 8th, 9th & 10th & 11th printed also in 1753 with Mr Bentley's Designs, of Wch there is a 2d Edition & again by Dodsley in his Miscellany Vol: 4th & in a Scotch Collection call'd *the Union* translated into Latin by Chr: Anstey Esq, & the Revd M Roberts, & publish'd in 1762; & again in the same year by Rob: Lloyd, M: A:

「ドッズレイによって1751年に出版，２ヵ月内に４版を重版，以後５，６，７，８，９，10，11版がベントリー氏のデザインにより1753年に出版。それに２版あり。更にドッズレイによってその雑録集第４巻に掲載され，Chr アンスティ氏及びＭロバート尊師によるラテン語訳がスコットランド選集『ユニオン』誌に掲載され1762年出版。そしてさらに同年ロブ：ロイドＭ：Ａ：によって」と記されている。

Edmund Gosse によれば「これらの合法的版の他に，この詩は主として海賊版として出された。*Magazine of Magazines* は２月の終りにこの詩を印刷し，*London Magazine* ３月の終りに，さらに *Grand Magazine of Magazines* は４月の終りに印刷した。グレイの名前が初めて出されたのは1753年の *Six Poems* の最後の版に於いてであった。」[24]とされるが，グレイの生存時代に "Elegy" が載せられた定期刊行物の詳細については雑誌として1751年の *The Magazine of Magazines* を初めとして *The London Magazine*, *The True Briton* があり，他の版として1751年の *The Dublin* 'Dodsley' を初め1753年の Bentley's 'Designs'，同じく *The Union*，1755年の Dodsley's 'Collection of Poems'，1765年の *First Dublin Edition of Gray's Poems*，1759年の *Love-Elegies, By Mr. Hammond*，1761年の With R. Blair's 'The Grave' 等枚挙に暇がない。この間の詳細については Francis Griffin Stokes による *An Elegy Written in a Country Church Yard By Thomas Gray* に詳述されて

いる。[25]

The "Pembroke" MS に興味深いもう一つの点がある。"Elegy" は116行から成る詩に Epitaph 12行からなるものであるが The 'Pembroke' MS にグレイ自身が付けた行数が80から100になり，90が抜け落ちた形となっている。これは明らかに詩行をグレイが付け間違えたものであり，100は90となるべきであったものである。

グレイはこの "Elegy" を Stoke Poges の教会の側にある大きな yew-tree（イチイ）の木の下で書いたとされるが，この詩の l. 13 に "that yew-tree's shade" として記されるイチイの木は現在も Stoke Poges の教会の正面入口の側，教会墓地左手に立っており，教会堂 Hastings Chapel の東側の窓の下にグレイ自らと彼の母親と叔母の眠る長方形の箱型のレンガ造りの墓が安置されている。この 3 人の墓に記された墓碑銘はそれぞれ下記の通りである。(1)(2)はグレイ自らが叔母と母のために記したものである。(3)はグレイの埋葬に際して彼のために記された墓碑銘である。

(1)

In the Vault beneath are deposited,
in Hope of joyful Resurrection
the remains of
MARY ANTROBUS
She died unmarried, November 5, 1749
Aged 66.

(2)

In the same pious confidence,
beside her friend and sister,
here sleep the remains of
DOROTHY GRAY
Widow, the careful, tender Mother
of many children, one of whom alone
had the misfortune to survive her.

She died March 11, 1753
Aged 67.

(3) Opposite to This Stone
In the same tomb upon which
He has so feelingly Recorded His Grief
At the loss of A Beloved Parent
Are deposited the Remains of Thomas Gray
The Author of "The Elegy" written in a
Country Churchyard
He was buried August 6th 1771.

この下の納骨室に喜びのよみがえりを望みつつ
メアリ　アントロバスの亡き骸を安置するものなり
未婚にして　みまかりき　1749年11月5日　享年66

同じく敬虔なるよみがえりの確信のもと，
その友にして姉の傍にドロシイ グレイの亡き骸眠りたり。
寡婦にして，数多き子らのかいがいしくも優しき母，
その子らのうち一人のみ残れる者が母より
生き長らえた不運を嘆く

この墓石の向い側
彼が愛する母を失いし悲しみを深く刻んだその同じ奥津城に
『墓畔の悲歌』の作者トマス グレイの亡き骸安置されしものなり
1771年8月6日　埋葬

教会にある埋葬記録には "1771－Thomas Gray, Esq. was buried August 6th" (Parish Resister of Burials) とある。教会の歴史と由来については下記の通りである。

Stoke Poges Parish Church of St. Giles
London の西 Eton の数マイル北 Buckinghamshire 州
"Stoke" とは元々a stockaded place（さく囲いの地）を意味する。

教会の歴史は，古くノルマンディ公ウィリアムによるノルマン征服以前の Saxon 時代にまで遡る。教会建築は 4 期に分けられ，先ず Chancel と呼ばれる教会堂内陣とその窓は Saxon のもの，その後 The Norman（ノルマン式 A.D. 1086年一柱，教会堂内陣の一部及び教会塔の一部）の建築が行われた。当時，William Fitz-Ansculf という貴族が，Manor 領地を所持し，その敷地に Norman Church が建てられたものである。William は William Stoches 或いは William Stoke という名で知られていた。その200年後，この Manor 荘園領主の邸宅の主，この貴族屋敷の女性相続人であった Amicia of Stoke として知られていた貴族夫人が Berkshire 州の騎士 Robert Pogeys と結婚した。この夫人の名の一部 Stoke とその結婚相手の騎士の名 Pogeys が一緒になって Stoke Poges という地名となった。教会の建築構造はその後 A.D. 1220年に Nave 身廊即ち教会本堂がノルマン式柱廊の上に初期ゴシック (Early Gothic) 建築で再建され，Hastings Chapel と称される赤レンガ部分がテューダー式建築として，A.D. 1558年に建てられた。教会塔には元々鐘があり，この塔から鳴らされていた。"Elegy" 冒頭の Curfew はこの塔から響いた鐘の音かと察せられる。教会内陣にかつて Thomas Gray が座していた祈りの席がある。詩人の母と叔母は現在 Stoke Court という名の West End Farm に居住していて，グレイはしばしば彼女達を訪れ長期間滞在した。グレイはここにあったあずまやの中で「イートン学寮遠望の賦」も作詩した。ケンブリッジ大学 Pembroke College にある詩人のこの詩の草稿に at Stoke, Aug. 1742 とグレイが記している。

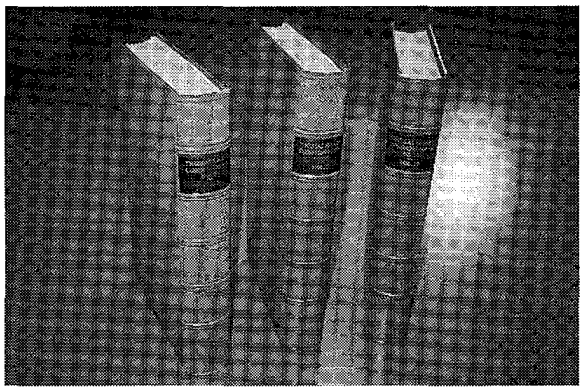
この教会に詩人トマス・グレイと共に特筆すべきことは，アメリカペンシルバニア州の開拓者として知られる William Penn が1644年に Charles I 世の統治したこの地に生まれ，Penn 一族は，1844年に William の孫で Stoke Park を所有していた Penn 一族最後の Granville が亡くなるまで，200年に

亙りこの地に住み，この教会に属していたということである。教会堂内にPenn一族の多くの名を記す銘板があり，Penn一族墓所は教会前部近くにある。但しWilliam Penn自身はここには埋葬されていずに，ここより6～7マイル離れたJordansにあるQuaker教徒埋葬地に葬られているとのことである。

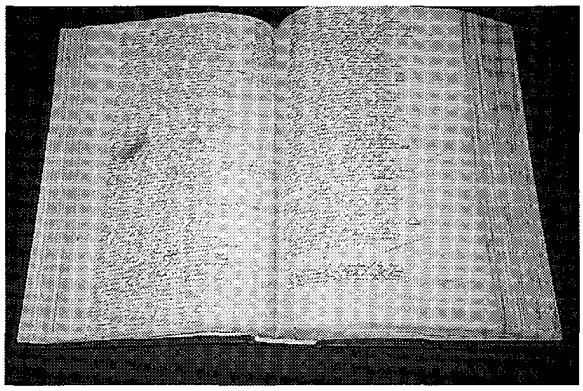
この小論の冒頭に“Elegy”が矢田部尚今によって訳出されたことを記したが，この詩の訳は10節，11節，19節のように，厳密に見れば所々に原詩の意訳となっている。しかし，七五調によって原詩を訳出しようとすれば，そのこと自体避けられぬ点であったであろうし，我が国古来の七五調によって日本人の精神的風土に即応して原詩の情調を伝えようとした訳業であったと思われる。「此処に生れて此処に死に都の春を知らざれば　其の身は浄き蓮の花思ひは済める秋の月」と訳された19節において，原詩にある“Far from the madding crowd's ignoble strife,”「狂乱の群れの恥ずべき争いから身を分かち」が後にT.ハーディの小説の題名 *Far from the Madding Crowd* (1874) として明らかな影響を与えたと思われるが，矢田部尚今が「いりあひの鐘」と訳した点に，筆者はかつて読み人知らずとして知られていた『拾遺和歌集』巻20哀傷1329に記された〈山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき〉を想起させられ，また『新古今集』巻2春歌下116にある能因法師の〈山里の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける〉といった古歌を尚今は諳んじていた可能性があったかもしれないと考えるのは想像が過ぎるのであろうか。因みにMiltonの *Il Panseroso* l.74-75には“I hear the far-off curfew sound / Over some wide-watered shore”とある。John Bradshawは“Elegy”冒頭の“Curfew tolls the knell of parting day” はグレイがDanteを援用したものと指摘し、Caryによる英訳を挙げている。[27] シェイクスピアにも“curfew”の例が *The Tempest* 5幕1場40、*Measure for Measure* 4幕2場75、*King Lear* 3幕4場116に、“curfew-bell”として *Romeo and Juliet* 4幕4場4に見られる。[28]

いずれにしても“Elegy”全体の基調にワーズワスの語る“an eye that has kept watch o'er man's mortality”「人間の死すべき運命を見護り続ける眼差し」を感じるのは筆者のみではないであろう。

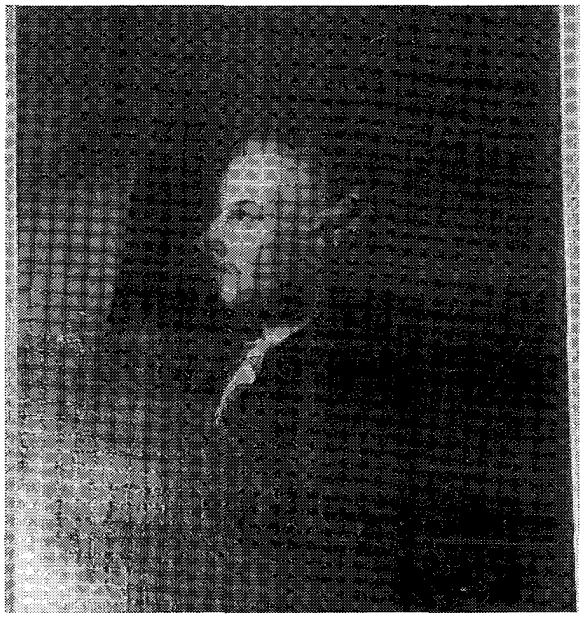
写真資料 1　Stoke Poges Parish Church of St. Giles と T. Gray の墓（箱型のレンガによる左側）



写真資料 2
The Common Place Book VOL Ⅰ-Ⅲ



写真資料 3　T. Gray 直筆の"Elegy"
The "Pembroke" MS



写真資料 4　トマス・グレイ肖像画
ケンブリッジ大学ペンブルック コレッジ
Thomas Gray Room

筆者撮影による写真資料（1－4）使用については，ケンブリッジ大学ペンブルック　コレッジ　International programmes Senior Administrator, Mrs. Lyndy Hilton ならびに Pembroke College Library Librarian, Mrs. Patricia Aske の助力を得て，以下のように許可を与えられたものである。"By permission of the Master and Fellows of Pembroke College, Cambridge"（8 Feb. 2007）

註

(1) 坪内雄蔵『英文学史』東京専門学校出版部　明治34年6月　p.524

(2) 同掲書　525頁

(3) 平田秀木『平田秀木選集第一巻』南雲堂　昭和56年3月　p.222

(4) John Curtis, *Cambridge* (Whitefriars, Norwick: Jarrold Publishing 2000), p.55.

(5) *ibid.*, p.54.

(6) Aubrey Attwater, *Pembroke Colage Cambridge:A Short History* (Cambridge Univ. Press, 1936), p.40.

(7) David Cecil, *Poets and Story-Tellers* (London: Constable, 1968), p.48.

(8) *ibid.*, p.57.

(9) *ibid.*, p.54.

(10) *ibid.*, p.5.

(11) *The Thomas Gray Archive* p.1.

(12) C.E.Harris, *Thomas Gray* (Slough, Berkshire:Maple press, 1971), p.3.

(13) *ibid.*, p.4.

(14) *ibid.*, p.4.

(15) John Bradshaw, *Gray's Poems* (London: Macmillan, 1907), p.vii.

(16) *ibid.*, p.vii.

(17) Paget Toynbee: *The Correspondence of Gray, Walpole, West and Ashton* (1734-1771) (Oxford Univ. Press, 1915), pp.101-102.

(18) Francis Griffin Stokes, *An Elegy Written in a Country Church Yard by Thomas Gray* (Oxford Univ. Press, 1929), p.7.

(19) *ibid.*, p.23.

(20) *ibid.*, p.24.

(21) *ibid.*, p.25.

(22) *Correspondence of THOMAS GRAY,* Edited by the late Paget Toynbee and Leonard Whibley (Oxford Univ. Press, 1971), p.327.

(23) *ibid.*, pp.341-342.

(24) *The Works of THOMAS GRAY* Edited by Edmund Gosse (London: Macmillan, 1884), p.72.

(25) 定期刊行物の詳細については Francis Griffin Stokes *op.cit.*, pp.36-61 を参照

(26) *A Guide to Stoke Poges Parish Church* by Reverend C.E. Harris 教会用小冊子のため出版社，出版年，頁数記載なし。

(27) John Bradshaw, *Gray's Poems* (London: Macmillan, 1907), p.101.

"And pilgrims, newly on his road with love, Thrills if he hear the vesper bell from

far, That seems to mourn for the expiring day"

(28) Marvin Spevack, The Harvard Concordance to Shakespeare (Hildesheim:Georg Olms Verlag, 1973), p.258.